キューバ農業リポート⑨

キューバの通貨事情と中南米文化圏

—農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄一—

これまでキューバの農業の概況、都市農業や有機農業の動向等について紹介してきたが、キューバの農業にとどまらず経済全体を理解していくにあたって欠かせないのが通貨問題だ。同じペソとはいいながらも、国民向けと外国人向けとでまったく別のペソが使用されており、その二重通貨の実態について紹介する。あわせてキューバの文化の源流である中南米文化圏についても触れておきたい。

◇苦肉の二重通貨制

チェ・ゲバラの肖像のあるＣＵＰの紙幣と硬貨

キューバで使用するため「ＣＵＣ」なるキューバ・ペソに両替していたが、市場でココナツ・ジュースを飲むためにナタでヤシの上の部分を切ってもらって、ＣＵＣで払おうとしたら、同じキューバ・ペソでも国民が使う「ＣＵＰ」の価格でしか表示がない。ＣＵＣでは払えないということで、今回の視察に同行してくれた最高裁判所の広報担当者にＣＵＰで立て替えてもらって、ココナツ・ジュースにありついたことがあった。一般の国民が使っているのはＣＵＰであり、日本円等で両替した時に保有することのできるキューバ・ペソ、ＣＵＣは、ＣＵＰとしては使用することはできない。国民が使っている通貨と外国人が使う通貨は別々の、いわゆる二重通貨制となっている。

現在のレート換算は1ＣＵＣ＝25ＣＵＰとなっているが、市場でもＣＵＰしか使えないところと、ＣＵＣでの支払いを前提にした市場とに分かれ、それぞれがすみ分けしており、最近では両方が使える市場が少しずつ出てきているという。そして概してＣＵＰしか使えない国民向けの市場は、販売されている商品の種類が限られているのに対して、ＣＵＣの市場は商品の種類が豊富で、輸入品が多くなっている。

キューバの公務員の平均給料は月額650ＣＵＰ程度であり、これをＣＵＣに換算すると26ＣＵＣとなる。1ＣＵＣは113.69円（2017年5月10日時点）であることから、公務員の平均給料は円では3000円ぐらいとなる。ＣＵＰで給料をもらっている人たちがほとんどを占める中、ＣＵＣでの支払いを前提にしたクラシックカーを使ってのタクシーや、外国人を対象にした民泊施設も増えている。筆者たちが民泊しているところからハバナの中心街まで、試しにクラシックカーのタクシーを利用して15分ほど走ったが、その料金は20ＣＵＣだというのを値切って15ＣＵＣに。仮にこれで1日5回客を乗せたとして、1日の収入は75ＣＵＣで、これは1875ＣＵＰとなり、1日で公務員の給料の3倍を稼いだ計算になる。筆者たちのキューバ滞在期間中、米国との国交回復もあって観光ブームでホテルはどこも満杯だったため、全行程で民泊となったが、相場は1泊（朝食付き）で40ＣＵＣ前後といったところ。

チェ・ゲバラの肖像のある硬貨

ヒメネスが旅した行程を描いた地図

自営で起業しＣＵＣを稼ぐ人が増えてきているが、これに伴って所得格差が広がりつつある。社会主義国であり、まだ配給制度も続けている国で、所得格差を抑制し、全体の所得向上を図っていくこと、さらにはいずれ二重通貨制を廃止していくことは重要課題で、相当にハードルは高く、正直なところ非常な難題だと言わざるを得ない。

◇「自然と人間のための財団」と中南米文化圏

キューバ文化の源流を訪ねる旅を敢行し、中南米文化圏の存在を実証したアントニオ・ニュニエス・ヒメネスが集めた膨大なコレクションの保存と、自然環境の研究を目的に設立された財団「FUNDACION ANTONIO NUNE JIMENES DE LA NATURALEZA Y EL HOHBRE（自然と人間のための財団）」に足を運んでみた。この財団の創設者でもあるヒメネスの研究成果はきわめて興味深い。ヒメネスはもともと地理学者だが、キューバ民俗学の創始者でもある。カストロとともに革命戦争を闘い、カストロとも仲良しであり、学者ながらペルー大使もつとめている。

そのヒメネスは1987年、64歳の時に、アマゾン川の源流であるエクアドルからキューバまでをカヌーに乗って旅しており、1年かけてこの旅を成功させている。キューバの文化はアマゾンに源流があることを実証するために、各国の各分野にわたる学者・研究者総勢300人を動員する大きな旅でもあった。

ヒメネスが収集した民具等

出発地点で手作りしたカヌーに乗って、エクアドルからネグル川を下り、ペルーに入ってナポ川へ、さらにブラジルに入ってアマゾン川を下り、途中から北上し、コロンビアからオリノコ川を下ってベネズエラに出て、次に海をこぎ渡ってプエルトリコ、ドミニカ、ハイチを経由してキューバに到着するもので、総行程は2万キロメートルに及んだ。時間をかけた、あくまで昔ながらの旅で生活用具をはじめとする膨大な量の民具の収集も行い、その成果が財団の建物内に陳列されている。

キューバ先住民のほとんどはスペインの植民地時代に亡くなっており、先住民が築き上げてきた文化がいかなるものか筆者の知るところではないが、国別に陳列された民具等を見る限りでは、アマゾンの上流からキューバに至るまでかなりの類似性・共通性があることは間違いない。

この類似性・共通性は、米国やメキシコにはないものであり、キューバは距離の近い米国やメキシコではなく、中米、南米と色濃い関係を持ってきたようだ。現代では米国を中心とする北米が圧倒的な影響力を有しているが、時代をさかのぼればむしろ北米の影響力は限定的で、中南米文化圏が大きな力を持っていたということに、新鮮な驚きのようなものも感じる。これからのキューバが米国と、そして中南米諸国とどのように関係していくのか、注目していきたい。

蔦谷 栄一（つたや えいいち）

東北大学経済学部卒業、1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長、常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表

〔主な著書〕
「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上創森社）「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）「農的社会をひらく」（創森社）など